

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	訪問リハビリ利用者におけるタブレット型端末でのテレビ電話を利用した遠隔診察の試み
演者名	林 なぎさ ¹⁾ 小口 和代 ¹⁾ 早川 淳子 ¹⁾ 宗像 沙千子 ¹⁾
所属	刈谷豊田総合病院 リハビリテーション科 ¹⁾

【はじめに】

訪問リハビリにおいて生活機能の問題に対し、医師との相談が必要と感じる場面は少ない。口頭の報告のみで診断が難しい事例は外来診察を検討するが、通院困難者も多く実施は容易でない。また生活環境と異なる病院での診察では状況把握が難しい場合もある。そこでタブレット端末でのテレビ電話を利用し、療法士が利用者状況を中継する遠隔診察を試みた。

【事例】

①42 歳男性、両被殻出血、四肢麻痺、手すり導入検討目的。②58 歳女性、SCD、誤嚥性肺炎からの退院後、併用の通所介護での昼食形態についてペースト食からソフト食への変更可否検討目的。

【方法】

Apple 社「iPad」2 台でビデオ通話アプリ「facetime」を利用。病院側 iPad を事例①は医師、事例②は医師・入院中嚥下リハビリ担当 ST が用い、利用者側 iPad を療法士が用いてテレビ電話を実施した。

【結果】

事例①では病院と自宅を中継。手すりを用いた動作場面を医師が確認した。医師は同席の母やケアマネジャーから普段の様子を問診しつつ、設置可能位置を福祉用具業者に確認、導入の指示に至った。事例②では病院と通所事業所を中継。外来嚥下検査の前段階として、医師と ST が昼食の嚥下状況を確認した。医師は ST から入院中の状況を聞きながら比較、摂取頻度限定で形態変更を指示。更なる変更には外来診察が必要との条件付き許可とした。医師の直接的な診断を仰げた点で利用者・他職種の満足度は大きかった。

【考察】

両事例とも診断は遠隔診察で問題なく可能だった。事例②のように直接検査が必要な場合には限界はある一方、外来診察場面では難しい複数の関係者からの情報収集ができた点は医師の診断を円滑にした。リハビリの診断と遠隔診察の親和性は高く、医師と療法士、そして多職種の時間的コストを軽減しながら在宅生活者をチームで支援するツールとして有用であると思われた。